特集

長大生、リレー講座に挑む

Nagasaki University Exciting Students

すっかり秋冬の恒例行事となった、長崎大学リレー講座。今回のテーマは「長崎からグローバルを考える」。そしてこのリレー講座のゲストに長大生がチャレンジ！暗中模索を繰り返しながら果敢に挑戦していった先に見えてきたものは…？

「長崎大学リレー講座2012」のプログラム

長崎からグローバルを考える		
10/27	米大統領選と中国指導部の交代が日本に与える影響	講師 マイケル・グリーン
11/1	世界で戦うということ ～侍ハードラーからの提言～	講師 為末　大
11/7	グローバル人材育成に対する期待	講師 北城恪太郎
11/16	グローバル時代に求められるもの ～マクドナルドの改革より～	講師 原田泳幸
12/5	福島原発事故で明らかになった日本的システムの限界と今後	講師 黒川　清
12/19	世界の中で求められる新しい日本人像	講師 寺島実郎

長崎大学白熱プロジェクト 始動！

Nagasaki University Exciting Students

世界で活躍できる人材ってなんだろう どうしたら議論を沸騰させられるの？

「チャンスは自分でつかむ、大学生なんだから」

ことの始まりは昨年一月に行われたNHKの「白熱教室※in長崎大学」。人気企画が長大文教キャンパスで行われたのです。しかし結果は「白熱というより、微熱？」。三ヵ月後、今度は長大医学部の高村昇教授による公開討論会が開かれます。その後、この討論会に参加した学生たちは、一つのチームを旗揚げします。その名も「白熱教室プロジェクト」。

リーダーの江島健一さん（医学部）は語ります。

「白熱教室が行われるとき、大学側は集客も内容も不安だったらしく各学部から数人ずつ呼んで学長がハッパをかけていたようです。でも本番では不完全燃焼に終わってしまった。参加した学生たちは、もっと議論を深められたのに、と相当な危機感を持ちました。そして高村先生の討論会。終わって、やっぱりこれは継続的な何かを、大学側じゃなくて自分たちでやらないとダメだ、大学生なんだからチャンスは自分でつかまないと…という声があがり、プロジェクトを立ち上げました。学長も応援すると言ってくださいました」。

とはいうものの、まずは人集めで三ヵ月経過。

「有名人を呼んで単発イベントをやろうと思えばできたかもしれない。でもそれは継続じゃない。そこで、大学内でリーダーシップをとっている学生に声をかけ、小規模な勉強会を行って、そこからちょっとずつ広げていきました」。

こだわっていたのは継続性。

「継続性のない変革ってあっという間に消えちゃうでしょう？ 自分自身、医学部で学びながら医療を変えたいな、と思っています。でもすごくハードルが高い。ならば少しずつ同じ世代の人たちと接しながら思いを共有していく。みんなが変化を望んでいれば、僕らが臨床をやりだしたときにボトムアップで変えられるかもしれない。何かを変えようと思ったら、やっぱり継続性。細くても長く続けていく、それも既得権益のない学生のうちに、と考えました」。

討論会や勉強会を通して、ファシリテーターの役割や議論を盛り上げる手順など、手探りながら少しずつ見えてきたような。そんな折、秋からのリレー講座の開催を知りました。

「へぇ、すごい人たちが来るんだ…ああいう人って少し早めに入るから、そのとき学生と話したりできないかな…と。最初はアイデアだけ。でもゲストの顔ぶれを見るほどに、これは実現できたらすごい。それで学長にお会いしたときに、思い切って切り出したんです。まあ、あの…若干無理やり感はありましたが（笑）」。

結果、学長からGOサイン！ それまでの地道な努力が功を奏したといえます。日頃絶対に会えない人々と生でやりとりすることで、刺激され気づきを得られるかもしれません。

「メンバーはみんなそこそこ物を言う人たち。まずは担当の回をそれぞれ充てて好きにやってみようということに。誰だって雑用はやりたくない。好きにやっていいというチャンスが欲しいんです。そのためのバックアップを組織で行います」。

各自ターゲットを絞って、著書を読むなど下調べが始まります。

「初回は講演後のセッションなので、講演後に『学生残って～』と呼びかけてもらおう」。

「どのくらい来るか数次第だけど、舞台に全部上げる？ 舞台と客席に分けるか」。

そんなこんなで、いよいよ初回スタート。

※「白熱教室」とは、アメリカ・ハーバード大のマイケル・サンデル教授が始めた討論型講義。数年前NHKが取り上げ放送、あるテーマにおいて、多様な考えの学生が意見を交わし議論を深めて理解しあう、その白熱したようすが視聴者の大きな反響をよびました。その後コロンビア大編や東大編など、シリーズで放送。今回の「白熱教室in長崎大学」では元NHK解説委員の小出五郎氏を迎えての討論でした。

写真は右から許嘉仁さん(経済学部)、リーダーの江島さん、日隈恭太郎さん（工学部）、桐山智大さん(経済学部)。

プロジェクトメンバーはそれぞれ学業にバイトに大忙し。そこでSNS（インターネット上のネットワークサービス）の一つ、facebookを利用してコミュニケーションを図っています。その生き生きとしたやりとりを一部抜粋してみました。

10月12日　ハイライト

お疲れ様です。報告です。**Choho**っていう長崎大学の雑誌知ってますか？ あの1月号の編集会議がさっきあって、参加していいよってことで顔を出してきたんですが、**リレー講座**で学生ディスカッションする件を話したところ、他のメイン特集まで決まっていたんですが、変更して、**［リレー講座×学生］**みたいな特集ということになりました。メリットが大きいと思ったので、記事にしてもらうことをお願いしました。〈青木〉

うお～^^♡♡♡**激アツ**やねっ^^♡やりたいやりたいやりたい～^^♡やっぱりバイト休んででもくればよかった～(;;)!!! 〈藤田〉

あと経済学部のPALLETの人間も何人かこの企画に興味を持っています。次の会議に何人か参加させても大丈夫ですか？〈青木〉

今回の**mission**の走り始めなので、いいと思いますよ、ゴールを共有しましょう。ちょっと**白熱PJ**の皆さんには未だ全貌を明らかにしていなくて、飛躍感はありますが、じわじわよりも、僕らが感じた喜びを感じてもらいたいので(*^_^*)〈江島〉

10月29～30日（第1回を終えて）

ある程度の意思共有のために**フリップ**とか面白いんじゃないか。テレビ番組的だけどみんなの意見が見られるし。**ザ・テレビっ子**的考え(￣▽￣)笑 〈桐山〉

フリップ面白いかも!!^^
てれびっこ最高ww 〈藤田〉

テレビっ子ばんざーい(￣▽￣) 〈桐山〉

集まった人も挙手も多かった。内容はともかく、これからもっと**面白くなるだろう**とわくわくしました！ 〈岩本〉

つうか、**白熱させたーーーーい!!!!!!!** PALLETメンバーは熱いので、白熱メンバーよろしくお願いします！ 〈青木〉

私、北城さんの回やります。経済学部の別のイベントとかぶってるんだけど、希少性という意味でこっちを優先させようか、と。〈田平〉

キタ――――(゜∀゜)――――!!
〈江島〉

Start!

緊張のなか始まったトークセッション 議論は白熱するのか!!

Nagasaki University Exciting Students

学生からの質問は、留学からTPP、原発問題まで幅広過ぎて、少々散漫な感じに。

十月二十七日

マイケル・グリーン氏

高校生も参加！しかし会場の設定に問題あり!?

第一回は開催まぎわの決定だったので、今回のみ講演後にトークセッションを催すことに。ファシリテーターの江島さんと藤田桃子さん（医学部）もスーツ姿でスタンバイ。まず行われたグリーンさんの講演では、日米関係や中国、アジア太平洋の国際問題が斬新な視点で語られました。その熱気も冷めやらぬままのトークセッション、呼びかけに応じたのは高校生を含む三十五名ほどの学生。そこで舞台上にゲスト、客席前方に学生が集まった形でスタート。テーマは「グローバル化する社会の中で私たちはどうすべきか」。最初はおとなしめだった学生も、だんだんと手が挙がるように。学生からは「一生懸命勉強して世界で戦っていけるようにならなければ」。それに対してグリーンさん「日本って素晴らしく安全だし外国語を覚えてなくても生きていける。でもグローバルを考えるとき外国語は大事だね。ここ十年、日本から外国への留学は半分に減っているのが寂しい」。学生からの「中国の若者は怖いイメージがある。グリーンさんから見て、日本と中国の若者の違いとは?」という質問には「私はアメリカの大学でも教えています。最近圧倒的に増えた中国の留学生は、尖閣諸島問題について最初は『けしからん!』と感情的なのに、しばらくたつと『自分の国では教えてくれないことが多くて面白い』という反応に。日本人の留学生はおとなしいね」。だんだんと議論が活性化してくると、学生からは「国によってグローバルな舞台で活躍する人、ローカル経済で生きていく人もいる。自由貿易についてアメリカは、どういう裁量で考えているのか」といった、グリーンさんをして「非常に難しい質問だ!」と唸らせる切り込みも。しかし、深い突っ込みが入ったところで残念ながらタイムアウトに。

あっという間の四十分が終わってからの反省会では…?

・講師との距離が遠過ぎて目線が合わない

・効率いい進行のために情報や意識の共有が必要

・参加した学生同士がやりとりできるように進行側が工夫すべき――などがあげられました。学生側の発言は多かったけれど講師の話も長く、整理されずに終わってしまったようです。

十二月一日

為末　大氏

人生における〈勝ち〉っていったい何?

セッション開始の三十分前に集合した学生たちは十名。なかには「どうしても会いたい」と佐賀大学から駆け付けた学生も。リレー講座の六人のゲストのなかでは為末さんが年齢的に一番近いこともあり、一同少々興奮気味。「皆さんはなぜ為末さんが侍ハードラーと呼ばれているか知っていますか?」という、ファシリテーターの田尻美佳子さん（県立大）と宮城舜さん（環境学科部）の問いかけからスタートしました。配布資料もあり、事前の情報共有もばっちり。前回の反省が活きています。「世界の学生に打ち勝つために必要なこと」に対する考えを、それぞれがフリップに書いて説明している途中で、ご本人が登場。

「好奇心」「自分の武器、強み」「世界基準を知ること」。次々発表する学生の意見に、自身でも学生セミナー「為末大学」を持っているだけに、真摯に耳を傾ける為末さん。「強みって書いてる人三人いるよね。僕もそう思う。日本の教育はなんでも平均的にできる人を育てようとするけれど、もうこれからは一点に特化する、自分にとってその一点が何なのかを知ることが大事なんじゃないかと思っています。得意じゃないことは、人にまかせてあきらめる、くらいのね（笑）」、するとメンバーの青木さん「その一点が何なのか。大学生活中に探しておきたいですね。例えばサッカーでもどこが自分の適性ポジションなのか、いろいろ乱れ打ちというかチャレンジしてみて、楽しくて成果が出たところを見つけるような」。すかさず為末さんが「自分はフォワードだと思っていたら、周りからディフェンダーだよ、なんて言われたり。人の意見を聞くのも大事だよね」。「でもそれを見つけるための具体的な方法ってなんだろう?」とファシリテーターの宮城さん。「うーん、あなたはどう?」と為末さんが周りに振っていきます。あれ? 立場が逆転?? 参加した学生全国や世界レベルになるとかなわない。すると強みが見えなくなるんです」。これには「そう、ぼくも世界に出てみるとまわりは凄まじく速いわけ。でもそういう時は新しいゲーム、ルールを作る戦いがあってもいいよね。iPhoneもそうでしょ? 新しいメソッドの協会を作って認定する、基準を作るために外に出て戦うという考え方もあると思う」。

たくさんの名言がありました。実はこれ、本番の講演では出てこなかった言葉ばかり。「好きなことを強みに、といっても、好きにもいろいろある。どうして陸上が好きなのか。努力するのが好き? 目立つから好き? 勝つから好き? 〈好き〉の因数分解をしてみよう」「陸上で世界一を目指しているときが一番いい。だから僕はもう一回挑戦したい。山頂を見たいから山に登る。でも山に登るために山頂を決める世界もある」。議論では、まず仮説の意見を言ってみる。決めつけないで撤退の余地を残しておくといい。言い合いのときは相手を刺し過ぎない、空気を読み過ぎないのも大切」一同、ああ～と納得。後半、為末さんからみんなへの問いかけが。「人生における勝利条件ってなんだと思う?これを考えると見えてくるよ」。お金、夢、幸せ。どちらかを選ぶ場面で譲れないものは何か。これは参加者への宿題になったよう。

人数を少なめに抑えたことで、議論は深まりました。でもこれは為末さんの優しさに依る部分も多かったのかもしれません。しかし大学側からは「十名は少なすぎ、もっと増やしたら」とアドバイス。人数が増え過ぎれば錯綜するし、難しい課題が残りました。

11月7日　ハイライト

ねーねー!!4回目のマクドナルドの**原田社長**、文教**近くのマック**でできないかなー!?(°o°)そしたら面白くないっ!?(^q^)笑　〈藤田〉

確かに!おもしろい笑　〈岩本〉

うわぁ～、それ**めっちゃウキウキ**しそう(;￣O￣)行きたい_￣|○　〈桐山〉

めっちゃ面白そうです!!**店員はすごいプレッシャー**でしょうけども(笑)〈日隈〉

見事にこの案は、受け入れられませんでした。残念!　〈江島〉

笑　ですよね～!^ ^　〈藤田〉

11月15日　ハイライト

黒川先生の勉強会を行おうと思ってます。今日のMTGでも話しましたが、原田さんの回に来てくれる人に**フライヤー配りたい**。添付しときます。たたき台なんで、どんどんたたいてください。〈江島〉

なんか**オシが弱い**気がする…。これをもとに私もあんま変わらんかもけど考えてみます!　〈藤田〉

あざざす!　**勧誘文章**書くの苦手なんよね^^;　是非協力お願いします!　〈江島〉

てゆか、**既に英語が読めない件**・・・(;;)笑　今日を楽しめ?つかみとれ?ねね!これは、勉強会に重きをおいた告知にするのか、当日に重きをおいた告知にするのか**わからんくなってきた～(><)!**いや、結局どっちもなのかもだけど…。とりあえずこれね^ ^ →来たる12月5日に開催される長崎大学リレー講座のゲストは、なんと!あの黒川清先生!そして、今回もリレー講座の前に白熱projectはゲスト×学生でセッションをやっちゃいます!黒川先生を知ってる!という方も、知らない!という方にもおすすめのこのイベント、先生と当日**白熱したセッション**するためにもぜひ!このイベントへの参加もお待ちしております!　〈藤田〉

invitedって書いてありますし、原田さんのに来てる人に配るのであれば、もうちょっと招待状感を強めに出すと誘われてる側は特別感が出ていいかもと思いました^ ^!!文も、「ぜひこのイベントにあなたのご参加が必要です・お待ちしてます」的な。　〈桐山〉

よりセッションを充実させるために…のところを　なんで毎回やってるのかって??そりゃあ**刺激のある大学生活**にしたいからさ!!なのはどう??　〈青木〉

目的はセッションを充実やけど、その先の目的は**刺激的**にするためやんなー〈江島〉

Step up? 中盤戦!! 炎上まであと一歩!

Nagasaki University Exciting Students

十一月七日 北城恪太郎氏

ゲストとの距離が詰めきれないあせり

だいぶコツがつかめてきたメンバー。田平由布子さんと岩本論さん（共に経済学部）がファシリテーターに挑みます。参加者は二十名、テーマは少し切り口を変えて、国際社会で活躍する学生を教育するため「もしあなたが学長だったらどうする?」。スタートがバタつき、参加者がフリップに書いている間にご本人到着。学生が順に意見を述べていきます。

「一年次の教養教育で日本のことをしっかり学ばせる。留学も最低二ヵ月間義務付ける」。北城さんは「外国人と仕事以外で会話するとき、確かに日本の歴史を知らないとホント恥ずかしい、特に戦前戦後の歴史。それから留学は一ヵ月お客さんで行くより最低一年、単位も取ること」。別の学生「入学定員を減らして授業料無料化、勉強しない学生を有料にしては」。「それ、すごく難しい、授業料は誰が払うの?国?借金だらけだよ。大学に行かない人が行く人の支援するの? 私学にやる親が国立の支援するの?」現実を見据えた意見でバッサリ! 自身も苦手な英語を克服して国際舞台で活躍している北城さん。「日本人の英語力は中国、韓国に比べ、ものすごく低いけれど、英語が話せればコミュニケーションOKかというとそれも違う。一方的に自己主張ばかりするのは外国人は嫌いますね。相手の理解度を考えながら会話で説得していく努力が必要」。そこに学生が「英語は大事だけれど、教育システムが問題では。例えば長大生のTOEICが○点上がると教員の給料が上がるとか、インセンティブを付ける。教員の評価を研究より学生への貢献で測る方がいいと思うんです」と発言すると「うん、僕もその通りだと思う。実際そういう大学では学生の満足度は上がるよ」と北城さん。お、クリーンヒット! 田平さんは議論を切り替えようと果敢に挑戦し「どういう大学にしたいかという問いは、それって実は自分が変わりたいという裏付けになるのかなと。例えば大学の英語を充実させたいということは、自分に語学力が必要だという…」と発言。しかし北城さんに「忙しいといって勉強しない人はヒマになっても勉強しないって中国では二〇〇〇年前から言っている。要は英語も自分で時間を作って勉強するしかない」と軽く流され、幕。

終わってからの反省会。

・テーマはよかったのだが、もう一歩「炎上」まで行けなかった

・ゲストとの距離を詰めきれなかった

・切り替えができず終盤までずるずるいってしまった

・この企画にメンバーとしてどれだけ関われたか?

しかし回を重ねるごとに意識の高い参加者が確実に増えてきました。

北城さんのスピード感あふれるコメントに、すっかり飲まれてしまう場面もありました。

十一月十六日 原田泳幸氏

事前のグループワークでホットなやりとり

「ただ今満席になっております」と場内アナウンス。夜九時半、ここは長大そばのマクドナルド。プロジェクトの打ち合わせで集まったものの、席を取るのも一苦労というくらい人気のマクドナルドの社長が次のゲストです。「今回は参加希望者が多いから、事前グループワークから始めよう」と担当の青木大輔さんと飯田航生さん（共に経済学部）は、リハーサルするほどの念の入れよう。

四回目は九十分のグループワークから始まりました。今回のテーマは「リーダーに必要な要素とは?」、五人一チームで五班に分かれ、結論を一言で模造紙に書くことに。「カリスマ性かなぁ…でもカリスマの定義ってなんだ?」「全体を見渡せる視野とか」「この人から言われたらしょうがないな、みたいな」「やっぱり傾聴力でしょう」「常識ある非常識ってどう?」。あちこちで声が上がり、シンプルマップ化するチームも。各班にはプロジェクトメンバーが一人ずつ貼りつき発言を引き出していきます。議論がまとまったところで原田さん登場。

いきなりプレゼンに入ろうとしたところ、「先に背景とか、どんな学生が集まっているか説明をして」という大学側からのアドバイスを受け、青木さん、あわてて紹介。一つ発表が終わった時点で原田さんからのコメントをもらおうとすると「いや、僕がここでコメントすると後の発表に影響を与えるから（笑）、一気に聞きましょう」と原田さん。そうだ、前回の轍を踏んじゃいけない! 結局全チームが発表してからアドバイスしてもらうことに。彼を囲んでみんな床に体操座り、目線がしっかり結ばれます。まず言われたのは「どれも間違っていない、でもどれにも欠けているものがある。リーダーシップって、柔軟な思考で社員一人ひとりをよく見て、彼らのパフォーマンスを最大にするために自分がどうしたらいいか、その自己管理能力が一番大切なんだよ。マネージメントは忍耐だよ。許す、受け止める」。部下から学ぶことがない組織は死んだも同然。私にチャレンジしてくれる人材を周囲にどれだけ揃えるか。アップルコンピュータ社長を経て日本マクドナルドへ。そして改革をしながら八期連続で売上を伸ばし続けたという原田さんが真ん中で穏やかに語りかけ、夢中で耳を傾ける学生たち。「人間の一番のモティベーションってなんだと思います?うちにはアルバイトクルーが十七万人いるんだよ」という原田さんの問いに、「責任感でしょうか。自分がやりたいことをやらせてくれるような」と答えたのは江島さん。「うん、成長ね、いい仕事をやらせて成長させること。その人の可能性を見ながら伸ばすの」と原田さん。そこで江島さんさらにつっこんで「僕らのディスカッションでリーダーにはカリスマ性が必要だという話が出ました。型破りな想像力とか先天的なものなんでしょうか」と質問。「私はアップルにいるとき、スティーブ・ジョブズをはじめ性格の全く違う四人のCEOの下で仕事をしました。ジョブズは天才。でも経営者かというと…? 四人それぞれタフだったり、型破りだったり。リーダーシップも求められるもので違う」とズバリ。そんな原田さんの一番の大仕事は後継者づくり。日本の経営者が一番苦手なのが、世代交代の問題。でもそれがリーダーシップには必要です」と語ります。「みんな、ずーっと自分がやっていくつもりでいた?」と言われ、さすがに一同、苦笑い。最後は「みんなあんまりハウツー本読み過ぎちゃダメだよ、頭でっかちの要領いい大人にだけはならないで」というメッセージを残し、笑顔で会場を去りました。

当初目標としていた「彼の本には書かれてない生コメントを引き出そう」は、どうやら成功。質問も次の発言につながるものが相次いで、事前のグループワークで試行錯誤した効果があったようです。もっとも青木さんは「イントロで会の趣旨や目的の共有を明確にするべきでした」。

さすが17万人のバイトを抱えるマクドナルド社長。学生との会話もスムーズ。

11月8〜9日（第3回を終えて）

田平さん、岩本君、**good work, and good job!** 今日の振り返りお願いします。〈江島〉

まずお詫びから。 ずっと落ち込んでてすみません。組織であることを忘れていたことが一番の反省点です。**マイナスからは何も生まれない**ということを自覚しました。反省点としては、アイデアを出すだけで結論まで持っていけなかったこと、すなわち切り替えができなかったこと、タイムテーブルが終盤で守れずにずるずるいってしまったこと。〈田平〉

多くの人が発言でき、個々の言いたいことは北城さんに答えをもらえたと思う。しかし、意見をいいたい人に当てるだけでファシリとして**コントロールできてなかった。** 議論がおこるような反対意見を書いてる人を当てたりして広げていくべきだった。ある程度意見が出たときに**ゴール**に向けて**ギア**をもっとはっきりと入れ替えるべきだった。〈岩本〉

自分の力のなさや話下手がもろ前面に出てしまって本当にダメだなと…ちゃんと結果を残せなかったのが**悔しくて悔しくて**仕方がなかったです。またリベンジさせてください。今日みたいな自分とは少しずつさよならしていきたいです! 〈田平〉

2人とも今日は本当にお疲れ様。**よかった!** と感じた参加者も多かったのでは?今後の課題としては、企画にどれだけメンバーが関わろうとしたのかも**反省点。** グループの代表は江島氏ですが、団体はチームなので、みんなで創っていきたいですね(^^)僕も関われなかった部分は反省です(；´д｀) 〈青木〉

やったじゃん!**また成長できるじゃん!!** いい機会だ。次はきっとうまくいくよ。〈江島〉

長大生の友人から
フェイスブックで
このセッションの情報もらって。
最近の長大ってすごい!
熊本大も負けねーよってことで
乗り込んできました!

熊本大学から参加した3人組。

チームの炎はこれから

燃え上がる!

To the next stage

Nagasaki University Exciting Students

十二月五日

黒川　清氏

出る杭になるには?「とにかく、世界へ!」

実はプロジェクトのリーダーである江島さんは黒川さんの熱烈な信奉者。今回のトークセッションも「あの先生を学生に会わせたい」がそもそものきっかけ。建てたテーマは「Crazy Ones-We are the people of tomorrow-」。

クレイジーワンズ（出る杭）って何? どうしたらそうなれる? メンバーは手配りのチラシまで作り事前勉強会を開催して、挑みました。

「先生のお話にちょっとでも疑問があったら学生がつっこみますから」とファシリテーターの藤田さんと塚原啓司さん（医学部）。しかし始まってみるとまったくの黒川さんペース。一貫性を持った生き方とは何か。異分野の人とのコミュニケーションはどうしたらいいか。問いに返ってくる球が速すぎて見えない!?「大学出てずーっと同じ会社にいるなんて日本は異常。その価値観に縛られる前に、とにかく一ヵ月以上外国に行って友達作って、自分が何者かを紹介できるようになる。実際に会わないとダメ。バーチャルとリアルワールドは違う」。藤田さんは「私は今まで、どうしても海外に行かなくちゃいけないのかな?と思っていたけれど、すでに世界はボーダーレスなんですね」「そう、あなたたちの一番のセールスポイントは日本人であること。でもそれは日本じゃ活かせないでしょ?」確かに。「僕は日本で組織を変えたいんだけれど」という学生には一言「変わらないね（笑）、難しいし時間もかかる。海外に行く方が話が早い。そこで生まれた"健全な愛国心"をもって、橋になる。出る杭になる。すると日本は変わり始める」。学生「ホリエモンは出る杭ですよね?」「そうだね、彼のやったことはいい。でも謙虚さも哲学のバックボーンもないよ。世界の中で自分は何ができるのか…最後は心、それは勉強じゃわからないんだよ」――次々繰り出すメッセージはストレート。

参加した学生は終了後「本気出して海外行きますか」「背中押されちゃったね」と口ぐちに。黒川さん一流のオーラを少しでも感じてほしいというメンバーの目標は、かなりいい線で達成できたかもしれません。

「日本の将来はあなたたちにかかってるよ!」
By黒川さん

「学生たちのパワーに敬服します。寺島さんに早く見せたい」

さて、最初の白熱教室イベントから学生の動きを見守り、セッションにも時折顔を見せていた片峰学長に、最後にお聞きしました。

「大学主導じゃなくて、学生たちが自主的に動き出せるかどうか…、彼らは彼らで考えてよくやっていますね。実は前回のリレー講座のときに最後に登壇された金澤一郎先生がね、場内を見まわしながら『長崎大学の熱意もわかるが、肝心の若者があまり見えないですね』と言われて、ずっと頭にあったのは事実です。でも今年は、白熱プロジェクトの彼らのおかげで、リレー講座の学生の参加が一段と増えたでしょう。金澤さんに見せたいくらいだ。彼らがフェイスブックなどで流して、熊本や佐賀あたりからも来てるんだよ。あの動員力はすごいね。最終日の寺島実郎さんが楽しみですよ」。

十二月十九日ですね。それにしても、トークディスカッションをすることで学生はゲストにぐっと近づき、興味をもって本講演も聞き入っている、いい循環ができあがっています。

「あのプロジェクト、それから春に旗揚げした核兵器廃絶研究センターのRECNAサポーターなど、少しずつ動きが出てきてますね。これが今後どこまで上昇していくか。一番難しいのは、学生は中心メンバーが常に交代していくこと。そのなかで引き継ぎ、繋げていくことがこれからの課題だね」。

長大祭で毎回行われる「学長とのしゃべり場」など、長大では学生たちとコミュニケーションを持てるよう、積極的に場を作っています。

さて、白熱プロジェクトのメンバーは、最終回の寺島実郎氏とのトークセッションに向けて着々と準備中です。

リーダーの江島さんは語ります。「このシリーズでは、好きにやっていいと言っていただき、感謝しています。今後は、こういう動きを授業単位化してもらえると素晴らしいですね。黒川先生は『大学は学び合う場』とおっしゃっていました。学生自らが問題を発見し、解決法を考える。今回は正直、何が正解かわかりませんでした。しかし私たちが出ていく社会はそんなところではないでしょうか。だからこそ学生が考え行動するチャンスが必要なのだと思いました」。

長崎大学にまたひとつ、「熱くて元気な長大生」という新たな個性が誕生しました。

制作スケジュールの都合上、六回目の寺島実郎さんとのセッションについては、次号でご紹介いたします。